日本山岳会 越後支部報

第 26 号
令和元年10月15日
発　行　公益社団法人日本山岳会越後支部
発行者　桐生 恒治
新潟県見附市学校町1－9－19
TEL･FAX 0258－62－0148
広報委員長　佐久間 雅義

私の一枚

眼前に現れた焼山

去る７月中旬、火打山ライチョウ保護活動の一環としての調査に県山協３名で参加した。梅雨の最中、火打山～焼山稜線はこの間ほぼ雲霧の中にあった。

影火打から焼山方向に少し下った所での作業の小憩中、突然ガスが切れ、対面に焼山－金山－天狗原山の稜線が現れ始めた。ガスが完全に取り払われることはなかったが、突然姿を現した焼山の山体は大きく、緑は鮮やかだった。数分後この姿も再びガスの中となった。

撮影　伊藤　直

この美しい妙高の自然を次世代に残すためにできること
―３巡目最初の第９回中部ブロック交流会―

越後支部副支部長　後藤　正弘

６月８～９日妙高池の平温泉「パークロッヂ関根」と笹ヶ峰・夢見平を会場に、静岡・山梨・信濃・越後の46名が参加して、第９回中部ブロック交流会が開催された。

初回は、１９８２（Ｓ57）年に中部ブロック結成・交流会が開催された。中断を経て、現在の交流がスタートしたのは東日本大震災のあった２０１１（Ｈ23）年からである。以来、越後・信濃・山梨・静岡と毎年交替で継続され、今回が３巡目最初の年となった。

初日は、山小舎風の「パークロッヂ関根」において各支部からの報告と「登山者にできること～妙高高原ビジターセンターの環境保全の取り組み」について、妙高高原ビジターセンター館長・春日良樹氏（支部会員）より講演があった。

２０１５（Ｈ27）年３月に誕生した妙高戸隠連山国立公園の特徴、ビジターセンターの役割と問題提起、外来種の問題として実践してきたオオハンゴウソウ・外来スイレン・オオバコ駆除について報告があった。また、火打山のライチョウ保護活動、妙高市環境サポーター募集、登山案内機能の強化のための踏査・エクスカーション、妙高火山の形成史など、妙高・火打山の調査研究・環境保全活動の必要性と重要性が熱く語られた。

登山者を中心とした多くの自然愛好者の理解と協力がなくては、美しい自然景観を次世代に残せないことが強調された。

このあと、温泉でくつろぎ、たくさんの郷土料理と地酒で盛り上がり「佐渡おけさ」も披露された。そして夜遅くまで交流が続いた。

翌日の笹ヶ峰・夢見平トレッキングは、青空に残雪と新緑の火打山・焼山・金山などが乙見湖に映えて素晴らしかった。

夢見平周辺は明治から昭和にかけて林業や炭焼きが行われ、１９３２（Ｓ７）年製材所が設けられた。等高線に沿ってレールを敷き、トロッコに伐採木や製材木を積んで馬に引かせ、黒姫駅に運び出していた。戦後、その製材所も閉鎖された。散策コースは、当時のトロッコ軌道跡を利用して地元有志によるボランティアで整備された比較的なだらかな遊歩道で、中高年には最適な人気ルートである。

ブナ、ミズナラ、ハルニレ、シラカバ、ダケカンバ林などの美しい森と、天狗山や神道山から小沢が幾筋も横切り、湿地性植物の宝庫になっている。当日は、ズダヤクシュ、ニリンソウ、チゴ

宿舎前にて

ユリ、シラネアオイなど多くの山野草が咲き乱れ、爽やかな高原（標高1，300m）の風が心地よかった。解説を聞きながらゆっくり歩いてトレッキングは半日で終了、信濃での再会を約束して散会となった。

初めての高頭祭

立入　清

7月25日、第62回高頭祭が弥彦大平園地において開催された。令和最初の高頭祭を祝うかの如く前日に梅雨明けした快晴の中、日本山岳会古野会長をはじめ本部より幹部の皆様や日本山岳スポーツクライミング協会会長をお迎えして実施された。

毎年、開催されている高頭祭であるが元号が変わった記念すべき年に70名程の参加をいただいた。参加者は改めて高頭先生の偉大さを認識した事だろう。

式典も支部名誉会員である平田大六氏による祝詞奏上から始まり玉ぐし拝礼等を行い日本山岳会古野会長の記念講演をいただき全員の記念撮影で滞りなく行事を終えた。

初めて参加させていただいた高頭祭であるが本部から多数の幹部がお越しいただけることは高頭先生がいかに日本山岳会に貢献されたかということの証だろう。改めて高頭先生に感謝したい。

高頭祭の神事においてはなくてはならない平田大六支部名誉会員におかれましては健康に留意されていつまでも協力いただけることを願っています。

その後、弥彦山頂に場所を移し第66回新潟県登山祭及び弥彦山たいまつ登山祭が行われた。山頂出発の前に八木原日本山岳・スポーツクライミング協会会長の山頂記念講演をいただき日本海に夕日が沈むのを前に一般参加者も加わり弥彦神社に向かい出発した。

四合目付近からは日も落ち始めつづら折りの登山道がたいまつの炎で幻想的な雰囲気を醸し出している。弥彦神社付近で待機していた鼓笛隊の先導により弥彦神社社殿から灯篭祭りと花火で賑わう中、沿道の皆様の盛大な迎えを受け誇らしい気持ちと恥ずかしい気持ちで弥彦駅までのパレードを行った。

初めて参加させていただいた各種祭典に感動と感謝をするとともに時代が変わろうとも厳かな行事が続くことを願います。

翌日、長岡にある高頭先生のお墓参と生家跡地を訪れて帰路についた。

最後に、この日の為に毎年ご尽力をいただく弥彦山岳会・関係機関にお礼申し上げ報告としたい。

第3回　子ども登山教室を開催

滝沢　信子

第3回子ども登山教室に、私は初めてスタッフとして参加した。

前日の8月10日（土）スタッフの打ち合わせを岳修山荘で午後4時半より開催。

小泉副委員長の司会で、桐生委員長の挨拶で始まり、鶴本事務局長より明日の日程説明と役割分担について、冊子に従って詳細な説明があった。

終了後、夕食をとりながら明日の個々の打ち合わせをし、9時には、明日に備え終了。

8月11日（日）予定より早めに起床し、個々に朝食を済ませ、登山準備。6時15分までには、最後のチームがマイクロバスで岳修山荘を出発した。

蓮華温泉ロッジに到着し、山の日の登り旗や横断幕の準備をして、参加する子どもたちや保護者を迎えた。参加者全員が揃い、班毎に整列、小泉副委員長の司会で開会式が始まった。桐生委員長の挨拶、応援救護スタッフの紹介、登山前のストレッチ、班に分かれて顔合わせをし、予定より15分早い、8時45分のスタートとなった。

子どもたちは、4班に分かれ、それぞれの班にリーダー、サブリーダー、班全体のスタッフが配属された。小学生11名、中学生1名、保護者5名で参加者17名。スタッフ22名が加わり計39名。

私は、第3班で女子3名（小学生2名、中学生1名）保護者1名、スタッフ4名、計8名のグループ。佐藤レイ子リーダーがトップで蓮華温泉（標高1475m）をスタート、快晴の暑い中を出発。登山道は、小石混じりで少々歩き難い。子どもたちは、スニーカーを履いているから特に身体が左右に揺れる。天狗の庭（標高2093m）に着く頃には、ガスに覆われ、かなり涼しくなった。目的の白馬大池（標高2380m）までは、30分毎に3～5分の休憩を取りながらの登山。白馬大池に着く頃、冷気の中霧が上がり、新潟県最高峰の小蓮華山を望むことが出来た。白馬大池周辺は、チングルマ、タテヤマリンドウなどの高山植物で溢れ、霧に覆われた美しい池。小屋前の広場には、カラフルなテントが数多く設営してあり、多くの登山客で賑わい、夏山シーズンの様相。子どもたちは、お昼をとりながら各々高山を楽しんでいた。

これから出発です

白馬大池で昼食をとる子どもたち

下山は、予定より20分遅れで白馬大池を出発し、蓮華温泉まで休憩を取りながら、16時全員無事下山した。閉会式後バスで移動し、糸魚川市民会館前で解散となった。

蓮華温泉ロッジからは雄大な雪倉岳が見られ、元気をもらっての出発。真夏の青空の暑い中、熱中症に気を付け、子どもたち

を気遣いながらの登山。白馬大池までの登山道には、沢山の高山植物達が私達を癒してくれた。美しい自然の織り成す風景を眺め、往復約6時間におよぶ登山は、子供達に大きな収穫があったと感じた。子どもたちのスニーカーの登山、登りは大丈夫そうに見えたが下山時は、つま先や足裏が痛く感じ大変だったと思う。今年の経験を活かして、来年も子ども登山教室に是非参加を願いたい。私は、通常の登山と異なり責任と緊張感で疲労したがとても良い経験となった。また来年も参加したい。

かくなる山歩きも在りけれ

坂西　徹朗

下越地方には、標高は低いが魅力的な山が連なる。五泉市郊外の大蔵山もそのひとつで、菅名岳の峰つづきにゆったりと横になっている。

山好きの老人たちが集う年末恒例のOB会が、小さな温泉宿であった。翌朝、再会を約束して散会した。どこにも寄らずに帰って雪囲いをする予定であったが、途中Uターン、大蔵山に登ることにした。

登山口に立つ案内板により歩き始める。橋を渡ると道は、ふたつに分かれた。左ははっきりした道、右は草に覆われた怪しげな道、山歩きにはこういう場面がよくある。

出だしから間違っていた。踏跡が杉林の中へ通じ急斜の林の中をつづら折りに登っている。獣道かも知れないが、そのうち本道に出るだろうと登った。一汗、ひと息、杉林を抜けると予想どおり道に出た。落葉が積もって踏み荒らされていない。こんな道はめったに歩けるものでない。ゴム底に伝わる感触を楽しみながら進んだ。

たびたびクモやじ（クモの巣）に触れたところで登山道でないことが分かった。林業の衰退で使われなくなった作業道なのだろう。この山は、その延長で登山道になったのだと想像したものだが。しかし、もとに戻って登り直すこともあるまいと進んだ。

杉林が終わると樵林になった。巨木、奇木が次々に現れなかなか立派、いいものが残されている山だ。倒木にはキノコがポツポツ残っている。「ハハア、きのこ採りがきているな。」やがて獣が動き廻った道が目まぐるしく交差するようになり道は消えた。

つい今しがた獣が立ち去った気配、上から猿が見張っている気配、窪地の水溜まりには、体を横たえ擦りつけた跡、這うように伸びた樵には足の短いのが通った擦り跡、猪も生きているのかもしれない。

やがて椿の群生が樹間を覆い、俗にいう藪漕ぎとなった。「何、シャクナゲ、這松のジャングルに較べればチョロイもんだ」と掻き分け進んだ。等間融に境界標が現れたりしたが、密生する灌木でしかもなだらかな尾根となって、鉈目ならぬ鋸目を入れながら潜ったり、枝が跳ねたり、リュックに引っかかったり、つんのめったりで、辛抱するより他はない登りとなった。

「急ぐことも無い、かくなる山歩きも在りけれ」アメ玉を含んでひと息入れた。

それからもうひと漕ぎすると登山道という道に出た。その目の前が山頂８０４ｍ、歩き始めて4時間半、久しぶりに満足感があるのがおかしかった。

ボキボキ乾いてしまった昨夜の宴会の握り飯を喰いながら、重苦しく広がる初冬の蒲原平野、蛇行する大河、阿賀野川を眼下に至福のひと時。

さてこれからどう歩く。菅名岳へ向かって巡回コースへ進むか、道標どおりこの道を下るか。ランプがあるから暗くなる頃には車に着けるから進むのもよかろうが、しかしぼうぼうとした初冬の山道をトボトボ辿る歳でもあるまい。来春、山桜の中を口笛を吹きながら歩く方が老人にふさわしい山歩きではないか。

下るにつれて登って来た尾根がどんどん離れてゆく。「尾根がひとつ違っているではないか。」と笑いがこみ上げてきた。

或る山で子供会が備えた登山ノートに老人の遠吠えを記したことがある。「山頂から眺めると、自然はかけがえのない大切なものだとわかる。自然はたくさんの事を教えてくれる。山登りをしたらいい。百名山など登らなくてもいいから山登りをしたまえ。次は君たちが自然を守るのだから。」

明るいうちに下田を通過したが栃尾からライトを点灯。家に着いたら真っ暗に。雪囲いの作業が焦げ付いてしまった。

登山道の無い藪山
宇連萩山（うれはぎやま）　612・6m

渡辺　茂

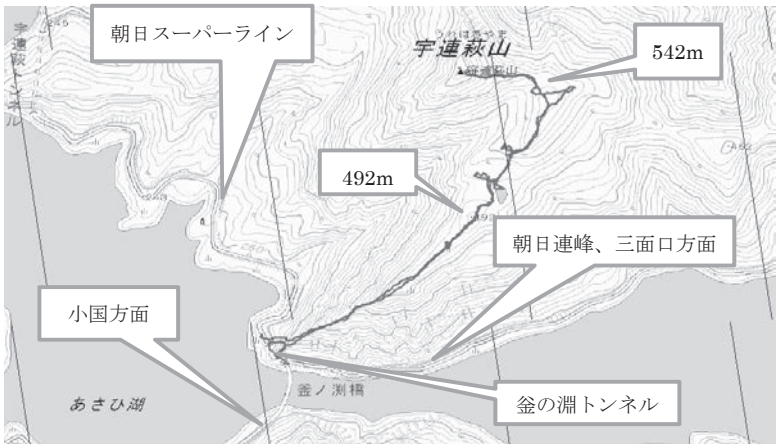
調査日：平成30年11月4日（日）
天候：晴　　単独
実施日：令和元年6月1日（土）
天候：晴　メンバー　3名

宇連萩山は「日本山岳ルーツ大辞典」によると「山名のルーツ」は、別名、うれんはぎやま、「山名のルーツ」はウレとは地形語で「奥の方」の意。三面川の奥の奥の方にあって、秋の七草の一つ、萩がよく咲くという山。と記載されている。

この山は朝日連峰の地図を見ていたら興味深い山名であり数年前から登りたい山であった。新潟から日本海東北自動車道を北上し、朝日まほろばインターから三面ダム方面に走行すると、朝日スーパーラインの起点となる。左側に三面ダムを見ながらスーパーラインを進んで行くと奥三面ダムへの案内版があり、ここを右折し円吾橋を渡り、さらに進むと三面メモリアルパークに「三面ここにありき」の碑がある。この辺から左側に宇連萩山が見えてくると登り口である釜の淵トンネルとなる。昨年の11月に調査し道路の開通を待って行くことにしたが6月では樹木も茂り大藪の登山であった。登山道が無いため尾根に直登するか、沢から登るか二通りのルートが考えられるが、今回の入山も朝日スーパーライン釜の淵トンネル入口付近から急斜面を登ることにした。トンネル手前の広場に駐車し出発。尾根に出るまでは急な斜面の藪こぎだ。急斜面の藪を20分ほど登ると尾根に乗る。尾根上は痩せ尾根で岩場が二か所ほどあるが特別問題はない。所々、鉈目や踏み跡もあるが、斜面が緩く平坦になると藪もひどく特に池の手前４６２ｍから５４２ｍ付近までは先の見えない大藪であった。４９２ｍを越えると大きな窪地があり、窪地の中に三つほどの小さな池がある。窪地にはミツガシワが咲き池にはイモリが泳いでいた。池から５４２ｍまでは急斜面でツバキが多く両手で藪を掻き分け、登りきると平坦となる。５４２ｍから山頂へ続く尾

根に取り付くため、一旦、下りとなるが藪で先が見えず、方向を定め、進むと空堀のような鞍部となり6～8m登ると山頂への尾根に乗ることができた。尾根は広く、木々で歩きにくく、赤布を付けながら登ると山頂に着いた。山頂は狭く木々を刈り払い三角点を探したが見つけることは出来なかった。山頂からは木々の間から残雪に輝く朝日連峰を展望することができた。下りは山頂から542mの間と池付近のルートは間違いやすく赤布頼りに下山した。

大辞典に記載されている「萩の花」は山中には無かった。



参考時間：釜の淵トンネル発（7：30）→350m尾根（7：50）→492m→池（9：15）→542m（10：10）→山頂（11：00着 12：00発）→釜の淵トンネル着（15：00）

玉珠峰（6178m）登頂

佐藤 レイ子

令和元年7月、中国青海省にある玉珠峰に登頂した。

玉珠峰（ぎょくじゅほう：英語Yuzhu Peak）は、中華人民共和国青海省にある山で、崑崙山脈の東部に属しており海抜は6178mである。青蔵鉄道や青蔵公路からもその氷河と共によく見える山で、モンゴルの言葉で「カカサイジモンカ」（美しく危険な少女の意）と言う。

この山は、1985年、日本山岳会創立80周年事業として、キ蓮山脈、崑崙、黄河源流に大規模な登山隊を派遣し、そのうちの一つが玉珠峰登頂であり、その時、桐生恒治支部長が隊長として参加されており、初登頂と言われていた。

今から34年前のことなので、交通事情や山の情報は少なく苦労された事と思う。

ところが2006年に、西寧からチベット自治区首府ラサ（拉薩）まで青蔵鉄道（総延長1956km）が開通しアクセスは非常に便利になった。高速道の建設も並行して進められており、各地で高層ビルが建設中で、巨大中国の発展が目ざましいことを実感した。

ラサには、チベット仏教の総本山、巡礼の聖地「大昭寺」（ジョカンジ）やポタラ宮があり、五体投地をする多くの信者がいた。ガイド同行以外は厳しく制限され、ポリスがいたる所にいて自由に歩けなかった。

青蔵鉄道は永久凍土の上や4000mを超える高所を走り、タングラ峠（5072m）が最高所だ。開通以来日本からいろいろツアーも行われており、一度乗ってみたかった。

今回は成都から国内線でラサへ向かい、そこから青蔵鉄道に乗った。

荷物検査が厳しく、ピッケルは没収され乗せられない。車で運ぶには手間もお金もかかり、登山には間に合わないため地元の山岳協会で借りた。アイゼンはセーフだった。（セーフというより気づかれなかった）。

車窓には広大な草原が広がり、羊、ヤク、チベットロバなどが優雅に草を食んでいた。列車は二段ベッドの4人部屋（一番いい場所とのこと）で、食堂車の食事も大変美味しかった。

雲のかかったニンチェンタングラ山脈やツォナ湖を眺めながら長江の源流であるトトホを通過し10時間、ようやく目指す玉珠峰が見えてきた。他の山より抜きんでて高い。そして夜10時ゴルムドに到着する。14時間の列車の旅だ。この鉄道は、駅は沢山あるものの停車する駅はほんの僅かで、止まってもホームに降りるのは禁止。山でも見えなければ退屈でしょうがない。

そして、登山基地のゴルムドで下車。カートもなくポーターもいないので、駅での大きな荷物の移動は大変だった。ガイドと地元登山協会の方が出迎えてくれてホテルに落ち着く。

翌日、車で200km離れたベースキャンプ（5050m）を目指す。

玉珠峰の北面を回り込むように進むが、山頂は雲の中。それに麓は広大な軍の施設がありカメラは禁止。何台もの戦車が並んでいて驚いた。セキュリティチェックで大渋滞し、崑崙山峠を過ぎてから、舗装された本線を外れオフロードに突入だ。道なき道を20kmほど進むとようやくベースキャンプに到着する。

今回の遠征は某社の特別企画で、男性1名、女性4名。厳しく人選され、ほぼ全員6000mの経験者。中には7000mや8000mの経験者もおられた。現在は一般的なツアーなどは行われていないため、ベースキャンプは私達と地元山岳会の人達だけで荒れていなく閑散としていた。テントの周りには多くの高山植物が広がり、ナキウサギやマームット、キツネなどがチョロチョロと動きまわっていた。

この日は天候が悪く大荒れになり、辺り一面真っ白。近くに落雷し肝を冷やした。テントで装備の確認をして過ごす。

翌日、天候回復。西南氷河の末端まで行

ベースキャンプから見た玉珠峰

き、ハーネスとアイゼンを着けスリングとカラビナ、ユマールの訓練を行った。帰りは、氷河の雪解け水が幾筋もの小川を作り岩が不安定で渡渉に苦労した。

アタック初日。幾筋もの川を慎重に渡り玉珠峰の南側の尾根に取り着き、4時間後、尾根伝いにC1（5600m）へ。風が強く寒いが天候はまずまず。振り返れば広大なチベット高原が望めました。その日はテントで仮眠。でも、テントが飛ばされるほどの強風が一晩中続き待機です。〝また今回もダメか〟という事が頭をよぎりました。

ところが、風が少し弱まり、急遽準備をして4時40分、ヘッドライトを点け慌ただしく出発。

C1からは雪上歩行だ。最初なだらかだが次第に傾斜が増してゆく。技術的にはそれほど難しくないが、寒さも厳しく呼吸が苦しい。天候が回復し雪のコンデションが良かったのが幸いした。地元山岳会のサポートを受けながら最後はユマールを使って登る。4時間後、ついに山頂に立った。

峠シリーズ

枝折峠（明神峠）

桜井 昭吉

「枝折峠」、「明神峠」、「銀の道」と枝折峠の名称が歴史とともに変わって利用に迷う事態になっていた。新しい枝折峠が車道で整備されて利用頻度が多くなったことから、もとの枝折峠を明神峠と呼んでいた。

地理的には魚沼市の湯之谷地区で峠の頂上から西側は信濃川水系魚野川と、東側は阿賀野川水系只見川で、峠の頂上は標高1236mで、頂上には山の安全を願って明神様（木花開耶姫）が祀られており、地元の信者により厚く信心されている。

枝折峠の名称は平安時代の末期尾瀬三郎房利が京を追われた時にさかのぼる。道に迷って途方にくれていた尾瀬三郎の一行に、童子が現れて木の枝を折りながら峠の頂上へと導いて、いつの間にか姿を消した。それ以来、銀山平に向かう峠を「枝折峠」と呼ぶようになった。

もともとの枝折峠は狩猟、山菜、鱒漁など地元住民が通う山道であったが、寛永18年（1641）只見川で鱒漁をしていた折立の源蔵が銀鉱石を発見したことにより、大規模な銀鉱の発掘が始まった。

銀山最盛期には戸数千軒、寺院3ケ寺があったという盛況であったが、その後安政6年（1859）銀山は廃坑になった。

時代は昭和に入り第二次世界大戦が勃発し、戦況が緊迫してくると銀山平のブナ林を伐採し航空機用材に必要とされ、枝折峠の車道開発が始まって、大湯温泉から石抱迄の車道が昭和18年（1943）に開通した。

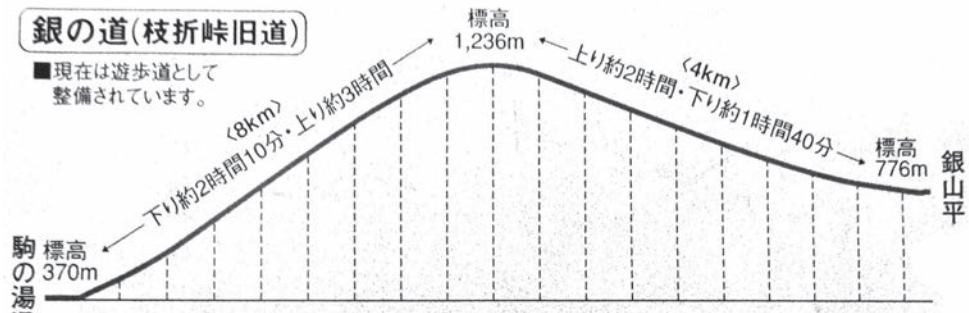
銀の道頂上の明神様

その後銀山は大きく歴史を塗り替える事態となった。昭和27年（1952）電源開発促進法が施行になり、奥只見ダム建設工事専用の輸送道路が昭和29年（1954）トンネル道路が開通するまでは枝折峠の車道を通っていた。ダム本体工事は昭和35年（1960）に完成した。

銀山・奥只見に至る道路は枝折峠の車道とダム工事専用のトンネル道路と銀採掘時代の峠道の3ルートが揃った。

車道の枝折峠はダム工事が終り、福島県桧枝岐村とつながって、昭和50年（1975）国道352号に昇格し、魚沼から行く尾瀬ルートなど利用が高まって今日に至っている。

本来の峠道である枝折峠は忘れさられた状態で、利用者が少なく荒れ放題であったが昭和60年（1985）湯之谷村老人クラブによって再整備され、「銀の道」と銘うった。



一合目	石抱（いしだき）	洪水で枝に石がはさまり、そのまま成長した木があったとのこと。
二合目	榛（はん）ノ木	榛の巨木がそびえていた。
三合目	オリソ	「御入り候」の転訛したものか？
四合目	十七曲り	つづら折りの坂道。
五合目	松尾根	松の巨木が繁っていた。
六合目	ブナ坂	ブナの大木が両側に繁っていた。
七合目	焼山	当時の山火事で、一帯が焼け果てたことから。
八合目	水場	定かに水場の跡が確かめられ、湧水が今も続く。
九合目	問屋場	問屋場で、季節遊女までいた。
十合目	大明神	山仕事や銀山普請の安全を願って、木花開耶姫「このはなさくやひめ」命をまつってある。
九合目	日本坂	日本中が見渡せるほどの展望。
八合目	仏堂（ぶっどう）	お堂があり、多数の仏像が安置されていた。
七合目	千体仏（せんたいぶつ）	多数の仏像を安置したところから。
六合目	中ノ水	付近一帯をこのように呼んでいた。
五合目	半腹石（はんぷくいし）	峠の頂と麓との中間点。
四合目	水函（すいかん）	湧き出す水を箱にため、水場とした。
三合目	楢（なら）の木	水楢の大木がそびえ、格好の休憩所であった。
二合目	目覚（めざま）し	芋川宿を早立ちすると、ここで夜が明けることから。
一合目	坂本	峠のはじまり。

て湯之谷村文化財に指定された。

ところが昭和41年（1966）国土地理院の2万5千分の1図が発行されたとき「八海山」と「奥只見湖」の図郭にまたがる枝折峠のルートが全く記されていなかった。

当時地図モニターをしていたので、国土地理院の担当に報告したところ、早速担当が調査に来て枝折峠のルートを挿入改訂した。このように本来の枝折峠は国土地理院から見放された状態であったが、現在は「銀の道」で復活している。

本来この峠は厳しいルートで、駒の湯側から登山口の標高370mで、峠の頂上が1236m、その標高差は866m、距離は8㎞。銀山側の石抱の標高が776m、標高差460m、距離は4㎞である。

銀の道には合目ごとに名称がつけられている。いつの時代につけられたかは不明であるが、登山口が一合であるから実質9区間で峠の両側にそれぞれ名前が付けられている。その地点には地形、眺望、利用場所など峠の状況が表現されていておもしろい。

現在、銀の道は新緑と紅葉の時期などハイキング、登山コースとして利用されている。当越後支部も平成26年（2014）紅葉が素晴らしい銀の道で支部行事の「公募登山」を行った。参加者38名の盛況で記憶に新しい。

事業委員会活動報告

2019年度上高地集会及び公募登山について

事業委員長（副支部長）　小山　一夫

一昨年7月は豪雨で上高地に入れず、昨年の9月は予定行動が出来ず雨の「焼岳」登山になりましたが、3回目の今年は晴天に恵まれ、予定通り行動が出来ました。1週間前、秋雨前線が日本列島の上に居座り天候を心配しましたが、前線も南下し晴れの美ヶ原・乗鞍岳を楽しむ事が出来ました。

早朝宿泊先の山岳研究所を発ち、乗鞍岳に向かいました。下部は晴れていましたが、登るにつれてガスの中となり、乗鞍スカイライン「畳平駐車場」の到着の頃はガスの中でしたが、準備中にガスもあがり快晴となり、登山道はコマクサを始め高山植物が多数咲いており、山頂は360度のパノラマで、目の前に御嶽山始め槍ヶ岳・穂高岳連峰が見えました。下山途中よりまたガスが沸きだし、乗鞍岳山頂はガスに隠れてしまいました。山行は天候が左右しますが、今回は十分に楽しむ事が出来ました。

公募登山は本部の公益法人化にともない、越後支部は2014年春より取り組みましたが。始めは参加者が簡単に集まると思い開始しました。ところが、参加者が集まらず大変な苦労をしましたが、事業委員の知人・友人に声掛けし、次第に参加者の輪が広がり始め、現在は多くの皆さんから参加いただき、また参加者からの声掛けで新しい参加者も集まり、石井スポーツのチラシやホームページからも応募が有ります。

今年度から女性の事業委員が中心となり、中高年の女性を募集し「平日トレッキング」を立ち上げました。当面は年2回の公募登山・「平日トレッキング」と「上高地集会」を中心に活動したいと思っております。活動の中で会員の拡大と山の素晴らしさを参加者に伝えていきたいと思います。今後も皆様のご協力ご支援をお願い致します。本年度実施及び予定は次のようになりました。

4月25日　平日トレッキング　長岡・東山　応募者11名
6月23日　要害山～朴坂山　応募者14名
8月24～25日　第3回上高地集会　美ヶ原・乗鞍岳　応募者17名
10月　平日トレッキング　篭町南場山～猪野山南場山　予定
10月　大毛無山　予定

乗鞍岳山頂にて

事務局からのお知らせ

●令和元年度越後支部年次晩餐会記念講演のご案内

一．日時：令和元年12月14日（土）11時・受付開始　講演12時～14時（入場無料）
二．場所：新潟東映ホテル　1階白鳥の間
新潟市中央区弁天2-1-6（新潟駅万代口より徒歩5分）☎025-244-7101
三．講演内容：日本山岳会のエベレスト登頂から50年～最近の登山界で何が起こっているか？世界における登山潮流の変化～
【上映ビデオ】：①NHKドキュメンタリー日本山岳会「1970年エベレスト登頂」（15分短縮版）②1953年英国隊エベレスト初登頂を「ヒラリーの息子が検証」（20分短縮版）
四．講師：神崎忠男氏（日本山岳協会前会長・日本山岳会元副会長）

●会員動向（2019年6月～9月）

①新入会員
寺田　敏哉（16529）南魚沼市
②物故会員
渡邊　富衛（10118）弥彦村6月12日
斎藤　宣雄（12254）新発田市7月26日
③退会者
永嶋　賢司（5392）上越市
④支部会員総数（9月30日現在）176名

編集後記

7月は梅雨前線の影響で長雨、梅雨が明けたとたんに猛暑、お盆明けからはまた長雨と、山行を計画したリーダー泣かせの天候が続きました。異常気象といわれますが、近年ではこのような状態が続いてます。

7月中旬、ライチョウを取り巻く火打山の環境保全を目的に、植生変化の調査及びイネ科植物の除去作業等、環境省の火打山植生調査に参加する機会がありました。

4年前火打山から焼山に登った時は、稜線上にはライチョウの餌となるコケモモやガンゴウランの大群落が見られました。今回の調査ではイネ科植物が浸食しコケモモ等はわずかに残っているだけでした。地球温暖化が確実に進んでいる証拠なのだろうか。

（井口　光利）